

第110回 定期演奏会

PROGRAM

オール・ドヴォルザーク・プログラム

Antonín Dvořák

チェロ協奏曲 口短調 op.104 (約40分)★

Cello Concerto in B minor, op.104

第1楽章 アレグロ *Allegro*第2楽章 アダージョ・マ・ノン・トロツポ *Adagio ma non troppo*第3楽章 アレグロ・モデラート *Allegro moderato*

— 休憩 (20分) — Intermission

交響曲 第7番 二短調 op.70 (約36分)

Symphony No.7 in D minor, op.70

第1楽章 アレグロ・マエストーソ *Allegro maestoso*第2楽章 ポコ・アダージョ *Poco adagio*第3楽章 スケルツォ・ヴィヴァーチェ *Scherzo: Vivace*第4楽章 フィナーレ:アレグロ *Finale: Allegro*指揮:クリスティアン・アルミンク *Christian Arming, Conductor*チェロ:スティーヴン・イッサーリス *Steven Isserlis, Cello* (★演奏曲)管弦楽:兵庫芸術文化センター管弦楽団 *Hyogo Performing Arts Center Orchestra*

2018 11/9(金)・10(土)・11(日) 3:00PM開演

兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催:兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますので予めご了承ください。

助成:  文化庁文化芸術振興費補助金
(舞台芸術創造活動活性化事業)
 文化庁 独立行政法人 日本芸術文化振興会

これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論家)

郷愁を呼び起こすチェコの名作2曲

わが国ではいつの頃からか標準表記とされている「ドヴォルザーク」は、実は誤りに等しく、「ドヴォルジャーク」あるいは「ドヴォジャーク」と発音する方が言語に近いことは以前の解説でも申し上げた通り(※)。とりあえずこの項では、いつものように「ドヴォルジャーク」を使用させていただく。

今日聴くのは、そのチェコの大作作曲家による協奏曲と交響曲である。「チェロ協奏曲」は、彼がニューヨークの音楽院長として赴任していた時期、あの「新世界交響曲」の間もなくあとに書かれた名曲で、音楽は壮大なスケールを持ちながらも、故国への切々たる思いに満たされて聴き手の心を打つ。音楽史上、最も広く親しまれているチェロ協奏曲が、これであろう。いっぽう「第7交響曲」は、一般的な人気度から言えばのちの「8番」や「9番《新世界より》」に一步を譲るにせよ、ドヴォルジャークの気魄と情熱が激しい勢いで噴出しているスリリングな作品だ。第3楽章は不思議な懐かしさを呼ぶ。

音楽之友社刊「音楽中辞典」では「ドヴォルジャーク」を、講談社刊「ニューグローヴ世界音楽大事典」(※)は「ドヴォジャーク」を採用している。新聞や雑誌などでも、チェコのスポーツ選手たちの名を表記する際には「ドヴォジャーク」としている例の方が多いようだ。

必聴POINT

ライター
おすすめ!!

チェロ協奏曲 口短調 op.104

《古今のチェロ協奏曲の最大傑作》

全曲にあふれる祖国への郷愁感、異国の地で生み出されたもの。第1楽章冒頭のオーケストラによる提示部でホルンが吹く第2主題、あるいは第2楽章中間部での切々たる主題など、一度聴いたら忘れられない望郷の歌だ。第3楽章中間部での叙情的な旋律も聴きもの。

交響曲 第7番 二短調 op.70

《ドラマティックな迫力も凄い》

第1楽章でのやや悲劇的な曲想は、ベートーヴェンの「第9」をモデルにしたようなところもある(調性も同じ二短調)。第3楽章は何か似ているようなフシだが、いかにもドヴォルジャークらしい歌だ。第4楽章では暗い情熱がひた押しに進み、最後は劇的な頂点へ。

PROGRAM NOTE

曲目解説 —
演奏をより深く楽しむために
東条 碩夫(音楽評論家)



チェロ協奏曲 短調 op.104

初演: 1896年3月19日 ロンドン

アメリカ滞在時代の最後を飾る大作

目覚ましい勢いで国際的にも名声を高めつつあったドヴォルジャークは、1891年にプラハ音楽院教授に就任したが、その直後、今度は新大陸アメリカから、ニューヨーク音楽院の院長就任の打診を受けた。これは同音楽院を主宰する富裕なサーバー夫人からの招きだった。もともと故郷に深い愛情を抱いているドヴォルジャークのこと、未知の場所への赴任にはためらいがあったが、報酬が素晴らしくよかった——それはプラハ音楽院の給料の20倍以上だったという——こともあり、またプラハ音楽院からも2年間の休暇をもらえることになったので、ついに承諾、1892年9月末、ニューヨークへの第一歩を記したのであった。

アメリカでの生活は、悪いものではなかった。現地の人々から温かい歓迎を受け、彼が自ら指揮して紹介した自作の数々も好評裡に迎えられた。鉄道マニアだった彼は、ニューヨークでも駅に行って機関車を見物し、またアイオワ州にあるチェコの移民村スピルヴィルをしばしば訪れては、故郷に似た雰囲気浸って、異郷にある身の心を慰めることができたのである。

だがやはり、その異国滞在は、わずか2年半で終止符が打たれてしまう。彼の望郷の念がいよいよ強くなっていったこと、不況のためにサーバー夫人が財政的苦境に陥り、音楽院からの報酬支払いも滞りはじめたことなどもその原因である。もっとも、心優しいドヴォルジャークは、サーバー夫人へ手紙で辞任を申し出た際に、給料未払いの件を責めることは一切せず、ただ「家庭の事情で」としか書かなかったという。

アメリカ滞在の時期に書き上げた作品には、有名なものが多い。そのいずれもが、聴き手の心に言い知れぬ懐かしい情感のようなものを与える不思議な力を備えているからであろう。それらの中には、「弦楽四重奏曲《アメリカ》」や「ソナチネ作品100」、「ユモレスク」もあるが、なんといっても最大傑作は、1893年に作曲した「交響曲第9番《新世界より》」と、滞在中の最後の作品——1895年春、帰国直前に完成——となったこの「チェロ協奏曲」である。もしドヴォルジャークが生涯にこの2曲しか書かなかったとしても、彼の名は永遠に人々の胸に刻み込まれたであろうと思われるほど、聴き手に訴えかける力の強い作品なのである。

曲は3つの楽章からなる。第1楽章では、憂愁と郷愁にあふれたオーケストラによる長い提示部から、早くもドヴォルジャークならではの、あたたかい懐かしさが流れ出す。第2楽章は叙情美の極みであり、闊達な第3楽章にも、いたるところに豊かな情感が満ちている。

初演は作曲者自身の指揮、英国の奏者レオ・スターンのソロと、ロンドンのフィルハーモニー協会の管弦楽団の演奏で行なわれ、大成功を収めた。

楽器編成

独奏チェロ、フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン3、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、トライアングル、弦楽5部

交響曲 第7番 二短調 op.70

初演：1885年3月17日 ロンドン

暗い情熱の爆発、彼の交響曲では異色の存在

ドヴォルジャークの交響曲は、9曲を数える。最も広く知られているのは、この「7番」以降の3曲だが、しかし——やや冗長な「1番」「2番」は別として、「第3番」から「第6番」までの素朴で美しい交響曲も、ドヴォルジャーク愛好者にとっては魅力に事欠かない作品なのだ。「第7番」以降が高く評価されるとすれば、それは作品に確固たる強い構成力が加わり、緊迫度の高い交響曲としての性格を強めるにいたったから、とも言えるであろう。

ドヴォルジャークは、早いうちからウィーン在住の大作曲家ブラームスや、有名な批評家ハンスリックから、その才能を高く評価されていた。ウィーンに移住せよと強く勧められたこともある。だが彼は、ウィーンを訪れることはあっても、移住の勧めには全く応じようとはしなかった。当時オーストリアのハプスブルク家の支配下にあったチェコの国民がどれほど苦しんでいるか、彼は身を以って体験していたからである。それゆえ彼は、ブラームスらの厚情には感謝しつつも、ただ音楽のみを通じて、ドイツ語圏内の人々と結びついていた。

その一方で彼は、英語圏内の人々には、不思議な親近感を抱いていたようである。アメリカ赴任もその一例だったが、英国にも計7回にわたり演奏旅行し、自ら多くの自

作を指揮して、あたたかい歓迎を受けていた。この「第7交響曲」の作曲も、1884年にロンドンのフィルハーモニー協会からその名誉会員に推され、作曲の委嘱を受けたのがきっかけだった。折しもドヴォルジャークはブラームスと会う機会があったが、彼がピアノで自作の「第3交響曲」を弾いてくれるのを聴き、作曲への意欲が猛然と高まったそうである。

ただし、この「第7交響曲」に顔をのぞかせる一種の暗い情熱は、ドヴォルジャークが当時のウィーンの音楽界から受けていた民族的な差別意識——ドイツ語のオペラでなければ上演しないという帝室歌劇場の強硬な姿勢(のちに撤回されたが)、あるいは自らの名前をチェコ語の「アントニーン」でなくドイツ語の「アントン」に一方向的に変更してしまった出版社ジムロックの横柄さなど——への怒りを反映している、とも言われている。

曲は、4つの楽章からなる。暗く激しい情感にあふれた第1楽章、民族音楽的な素朴さを秘めた第2楽章と第3楽章、そして再び激しい、しかも起伏の大きな旋律で劇的な盛り上がり聴かせる終楽章。ドヴォルジャークはその第2楽章を書き上げた時、「祖国に神のご加護を」が私のモットーだ、と語ったという。

初演は、彼自身の指揮で行なわれ、大成功を収めた。そしてこの曲は、リヒター、フォン・ビューロー、ニキシュら、当時の大指揮者たちにより広く紹介され、ドヴォルジャークの名声を高める一因となったのである。

楽器編成

フルート2(ピッコロ持替)、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部



作曲家プロフィール

アントニーン・ドヴォルジャーク (1841-1904)

Antonín Dvořák

チェコ最大の作曲家であり、民族主義音楽／国民楽派の最高峰の作曲家のひとりでもある。生家は肉屋と旅館を営んでいた。若きアントニーンは、先輩スメタナが指揮する管弦楽団でヴィオラ奏者を務めたこともある。後年には、ケンブリッジ大学から名誉音楽博士、プラハのカレル大学から名誉哲学博士の称号を受け、オーストリア終身上院議員として貴族にも列せられた。大作曲家たちの中では、幸福な家庭にも恵まれた稀有の存在であった。